

プロ野球で、多くの名選手を育て名伯楽とうたわれた野村克也氏の近著に「野球論集成」というのがある。



60年の野球人生を哲学した野村克也氏の最近著作

野村氏は、各チームの監督時代、選手たちを指導する際、社会人としていかに生きるべきかという「人生論」を説くことで知られた。身体的な才能に恵まれた野球選手は、とかく、力や勤にたよりがち。個人商店主でもあるから、どうしても、チームという「社会」を意識することがおろそかになる。野村氏はまず、意識改革を選手に促す。試合で何を目

指すべきか、プロである以上、きままにプレーするのではなく、一挙手一投足に根柢をもて。そのためには、日々研鑽を積み重ねろと迫るのだ。

その野村氏が「野球人生の集大成をまとめた」のが、前述の著書だ。さっそく手にとってみたところ、驚くべきことが書いてあった。

「判断と決断」という章に、「日本は大きな自然災害に次々と襲われている。自然との驚異と対峙するにも、まず正しい判断をし、いざ必要となれば覚悟をもって決断する」とある。つづいて、ただしがきの一文があって、「判断」をないがしろにして、「決断」を連発するのは愚の骨頂だという。つまり、日々研鑽を積み重ねて「正しい判断力」をみにつければ、おのずと、「決断する覚悟」がでてくると説く。

防災において「日々の研鑽」といえば、防災教育、計画策定、訓練のことを指す。

さらに野村氏は、「正しい判断力を磨くために、毎試合、完全試合をいかに実現するべきかシュミュレーションをする」という。防災で「完全試合」にあたるのは「犠牲者ゼロ」を目指すことと同意である。

高知県の黒潮町の大西勝也町長と話した際、「防災の要諦とは突き詰めて考えることである」ということで一致した。黒潮町といえば、南海トラフ巨大地震の想定で、津波34メートルを突きつけられた。大西町長は、全職員を防災担当とし、各世帯ごとの避難計画を策定することに取り組んでいる。「その時にいかに行動するべきか」を「正しく判断、覚悟をもって決断する」ために、いわば、「完全試合（犠牲者ゼロ）」のシュミュレーションに日々取り組んでいるのである。

野村氏は、本のあとがきに、「60年間の野球人生で蓄積した野村の考えはいまだに、そして永久に完成をみない」とただしている。

人間は考える葦である、という言葉は誰でも知っているが、そのことを体現することに価値をもたなくなってしまう現代社会において、警鐘を鳴らしたのが一野球人であることに驚き、真理に到達する道の多様さに喜びを感じた次第である。

(平成 29 年 5 月)